

平成28年度
群馬県子どもの生活実態調査報告書

平成29年3月

群馬県こども未来部

目 次

第1章 調査実施の概要.....	1
1 調査趣旨・目的.....	1
2 調査内容.....	2
第2章 現状分析.....	4
1 現状.....	4
(1) 経済的困窮について.....	4
(2) 学力の遅れ・生活力の不足について.....	8
(3) 親子の関わりの問題について.....	16
(4) 親の孤立について.....	21
第3章 課題と考察.....	23
1 問題解決への課題とヒント.....	23
(1) 支援を必要とする子どもの掘り起し（アプローチ）.....	23
(2) 子育てに悩む親・孤立する親への支援.....	25
(3) 「貧困」という言葉への抵抗感.....	29
(4) 民間団体と行政との関わりの薄さ.....	30
2 考察.....	32
(1) どのような家庭環境であっても、たくましく成長できる『子ども支援』.....	32
(2) 子育ての苦労をともに支える『親支援』.....	33
(3) 親子のつながりを確かにする『親子関係支援』.....	34
第4章 支援機関等職員調査.....	35
1 調査目的.....	35
2 調査対象と調査内容.....	35
(1) アンケート調査.....	35
(2) ヒアリング調査.....	36
3 調査方法と調査時期.....	36
4 回収状況.....	36
5 調査結果.....	37
(1) アンケート調査.....	37
(2) ヒアリング調査.....	55
第5章 社会資源調査.....	58
1 調査目的.....	58
2 調査対象と調査内容.....	58
(1) アンケート調査.....	58
(2) ヒアリング調査.....	58
3 調査方法と調査時期.....	58
4 回収状況.....	59

5 調査結果.....	59
(1) アンケート調査 [NPO法人等].....	59
(2) アンケート調査 [社会福祉法人].....	66
(3) ヒアリング調査.....	68
資料編.....	74
1 支援機関等職員調査 アンケート調査票.....	74
2 社会資源調査 アンケート調査票.....	79
(1) NPO法人等	79
(2) 社会福祉法人等.....	81

第1章 調査実施の概要

1 調査趣旨・目的

本調査は、「群馬県子どもの貧困対策推進計画」（計画期間：平成 28～31 年度）を踏まえ、今後における子どもの貧困対策の推進に資するため、県内の子どもや家庭がどのようなことに困っているかを把握し、そこで明らかになった現状や課題等を分析することにより、今後の県や市町村における効果的な施策展開を検討するために実施するものである。

「子どもの貧困」については、経済的な困窮だけでなく、学力や生活力（基本的な生活習慣、自己肯定感、社会性など）をはじめ、人とつながる力の不足など、幅広く捉える必要があると考えている。

子どもは家庭や地域の中で、自立するために必要な学力や生活力などを身につけながら育っていくが、そのような力を身につけられない状況や環境こそが「子どもの貧困」の要因ではないかと考え、現場で子どもや家庭の支援に携わっている職員から、聞き取りやアンケート調査を行うこととした。

そのため、本調査は、「現状の数値化」（量的な統計）ではなく、今、子どもや家庭では何が起こっているのか、どんな気づきが必要なのか、事例やヒアリングなどの質的な情報からその課題の洗い出しを行うことを主眼としている。数値だけでは把握できない事象を拾い出すことで、子どもや家庭をより理解して、今後の支援に活かしていこうというものである。

なお、事例やヒアリングで紹介された事象は、支援機関等の職員が、様々な困難を有し、特に支援が必要と感じているケースであり、また、この調査で聞き取った内容以外にも、まだ多くの課題があることが推測されることから、今後も情報収集に努めていくこととしている。

2 調査内容

本調査では、県内の子どもや親の姿を、「第7回ぐんま青少年基本調査」の一部内容、「平成28年度ひとり親世帯等調査」の一部内容、及び子どもや家庭を支援する立場の職員へのアンケートやヒアリングにより把握し、併せて、社会福祉法人やNPO法人等による「子どもや家庭を支援する事業」の実施意向等を把握する。

本報告書では、以下の4つの調査を総合的に分析した結果を取りまとめている。なお、本文中において、各調査の引用分類として、以下の「調査A～調査D」を明記した。

○調査A：支援機関等職員調査（平成28年12月～平成29年2月実施）

調査A-1：支援機関等職員調査（データ）

調査A-2：支援機関等職員調査（事例）

調査A-3：支援機関等職員調査（ヒアリング）

○調査B：社会資源調査（平成28年12月～平成29年2月実施）

調査B-1：社会資源調査（NPO法人等）

調査B-2：社会資源調査（社会福祉法人）

調査B-3：社会資源調査（ヒアリング）

○調査C：第7回ぐんま青少年基本調査（平成28年11月～12月実施）

調査C-1：青少年基本調査【小学生】

調査C-2：青少年基本調査【中学生】

調査C-3：青少年基本調査【高校生】

調査C-4：青少年基本調査【保護者】

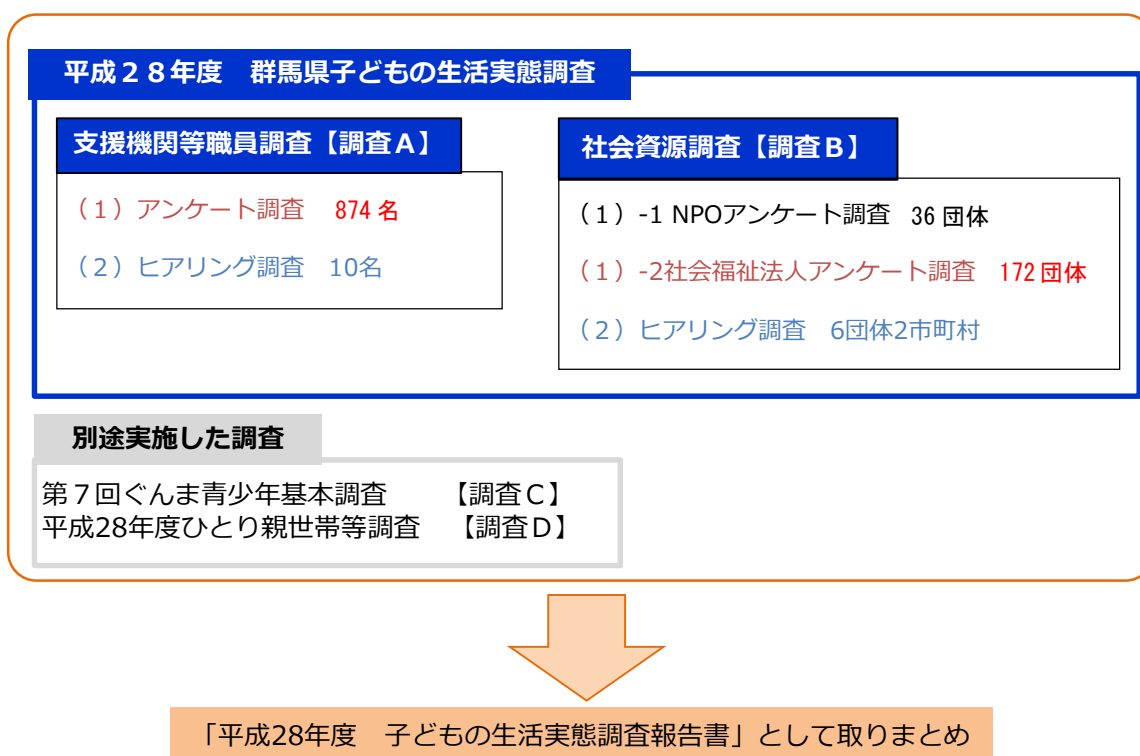
調査C-5：青少年基本調査【教員】

○調査D：平成28年度ひとり親世帯等調査（平成28年8月～9月実施）

（※本文中では「調査D：ひとり親調査」と記載）

◇ 「調査A：支援機関等職員調査」及び「調査B：社会資源調査」については、本調査（子どもの生活実態調査）のために実施した調査であり、両調査の詳細結果内容については、本報告書第4章・第5章に記載した。

<図表 1.2.1 本報告書の分析対象とした調査>



<図表 1.2.2 各調査の対象者>

調査		対象者
調査A 支援機関等職員調査	(1) アンケート調査	・ 県内の支援機関職員 (p.35 参照) : 計 874 人
	(2) ヒアリング調査	・ (1) の回答者から 10 人を抽出
調査B 社会資源調査	(1) -1 NPO アンケート調査	・ 県内のNPO法人等 (p.58 参照) : 36 団体
	(1) -2 社会福祉法人 アンケート調査	・ 県内の社会福祉法人 (p.58 参照) : 172 団体
	(2) ヒアリング調査	・ (1) -1、(1) -2の回答者から 6 団体を抽出
調査C 青少年基本調査	アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県内の小学5年生 : 681 人 ・ 県内の中学2年生 : 660 人 ・ 県内の高校2年生 : 484 人 ・ 上記小中学生の保護者 : 1,278 人 ・ 18~29歳の勤労青年・学生 (県内に勤務、通学) : 611 人 ・ 県内の相談機関等において自立に不安を感じている若者 : 63 人
調査D ひとり親調査	アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県内の父子世帯 : 141 世帯 ・ 県内の母子世帯 : 1,721 世帯

第2章 現状分析

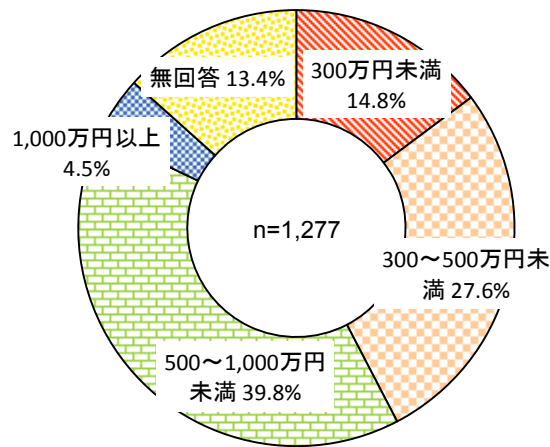
1 現状

(1) 経済的困窮について

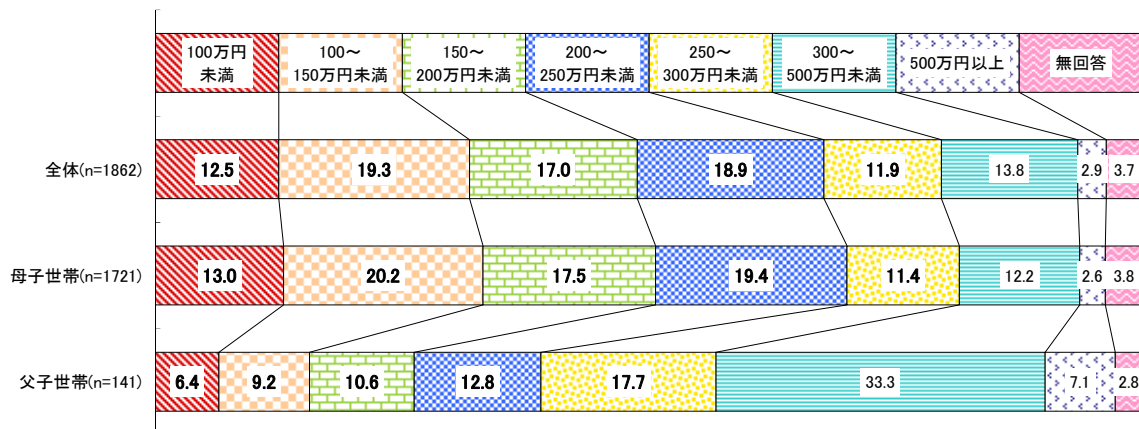
1) 数字から見る現状

『調査C-4：青少年基本調査【保護者】』では、世帯年収「300万円未満」が全体の14.8%であった。一方、『調査D：ひとり親調査』では、「母子世帯」の8割(81.5%)、「父子世帯」の6割弱(56.7%)が世帯年収300万円未満であった。

<図表 2.1.1 調査C-4：青少年基本調査【保護者】 世帯年収>



<図表 2.1.2 調査D：ひとり親調査 世帯年収（世帯類型別）>



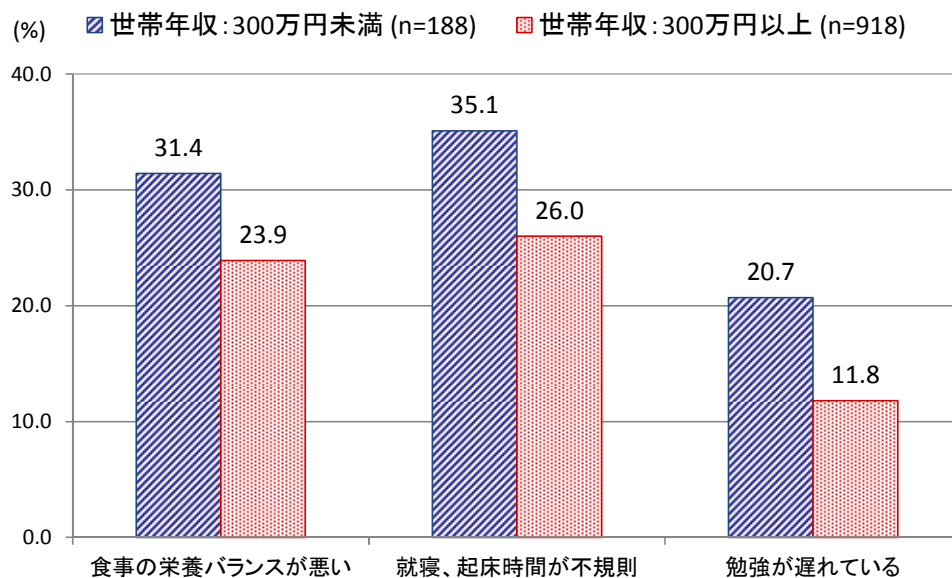
■ 「年収300万円ライン」の設定について

前橋市の生活保護基準を基に生活保護費を算定すると、母子世帯（母20~40歳、子ども1人6~11歳）の年間受給額は約214万円となる。この金額を可処分所得とし、税や社会保障費を見込んだ場合、給与収入では約268万円程度と想定される。

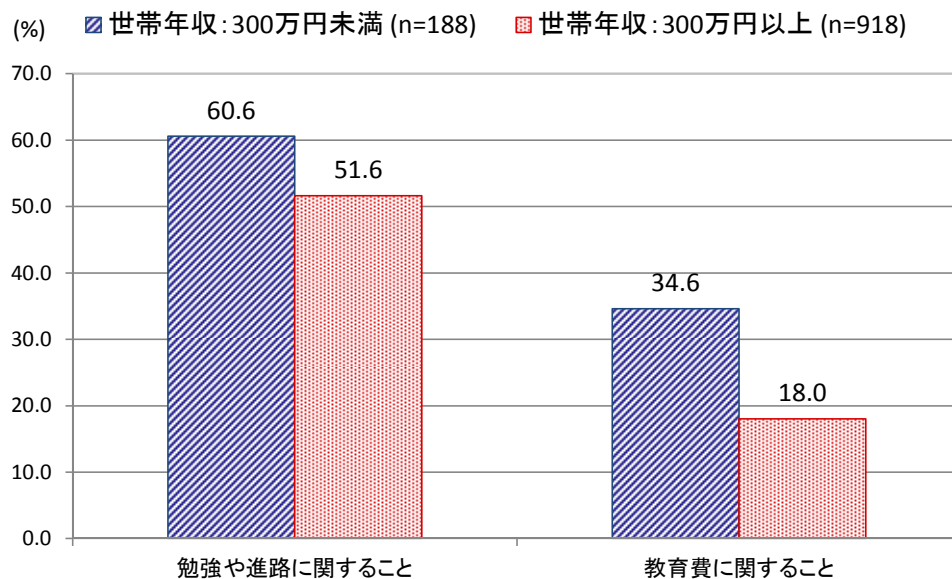
このことから、本分析においては「世帯年収300万円未満か否か」を、生活困窮を分析するラインと定義した。

世帯年収「300万円未満」の世帯において、保護者は子どもの実態として「食事の栄養バランスが悪い」「就寝、起床時間が不規則」「勉強が遅れている」と回答する割合が高くなっている。また、子どもの「勉強や進路に関すること」「教育費に関すること」について悩んでいると回答する割合も高い。食費や衣類の購入費といった基本的な支出について困っているとの回答も見られる。これらのことから、経済的な要因が子どもにマイナス面の影響を与えていることが考えられる。

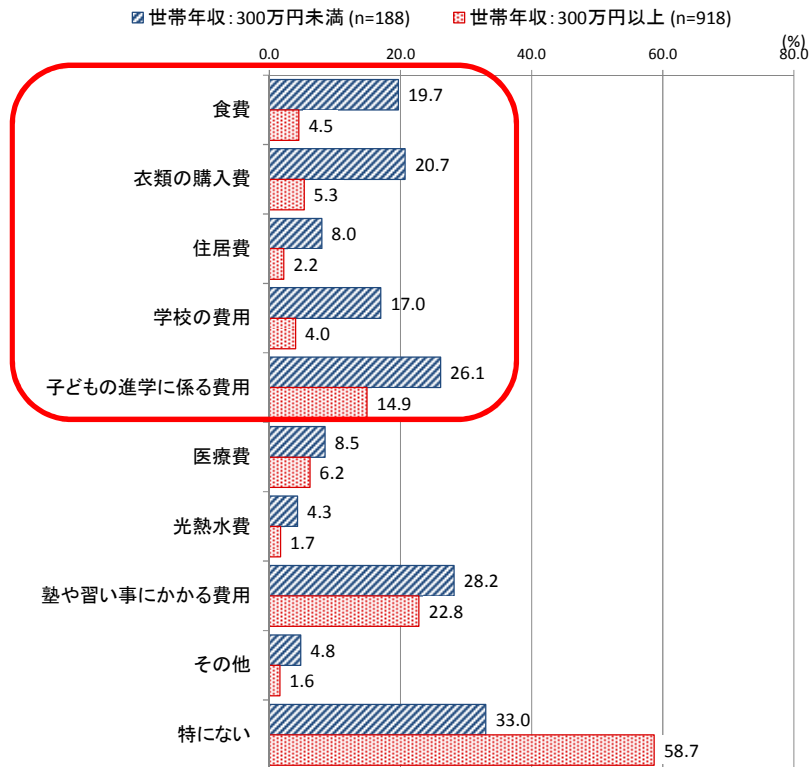
<図表 2.1.3 調査C-4【保護者】V（1）子どもの食事や生活であてはまること>



<図表 2.1.4 調査C-4【保護者】I（2）子どものことで悩んでいることや不安に思っていること>



<図表 2.1.5 調査C-4【保護者】V(2) 最近1年間に、経済的に困ったことや悩んだこと>



2) 事例・ヒアリングから見る現状

- 調査A-2：支援機関等職員調査（事例）
- 調査A-3：支援機関等職員調査（ヒアリング）
- 調査B-3：社会資源調査（ヒアリング） から

<図表 2.1.6 事例・ヒアリングから見る現状：経済的困窮について>

項目名	子どもや家庭を取り巻く状況	回答者（順不同）
学校生活・学業・進学等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済的理由で修学旅行に行けないケースがある。 ・ 志望校に合格しても、入学金が払えず除籍となり、その後、勉学への意欲が低下してしまったケースがある。 ・ 費用面から、大卒資格を得ることが難しい場合がある。 ・ 経済的理由で公立学校に進学させたい保護者と、私学を希望する子どもの間でトラブルが起こることがある。 ・ 家庭に車がなく、通える学校に制限が出てきてしまう。 	児童相談所職員 公立学校の教員 子育て支援拠点の職員
家庭の状況と親の安定した就労	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済的な苦勞は、親の心のゆとりに関係し、子どもへの対応にも影響を与える。 ・ コミュニケーションが苦手等の理由で、親の就労が安定しない場合は、家庭の安定にも影響が見られる。 ・ 景況が良いと親の雇用が安定し、家庭や学校生活も安定するようだ。 	公立学校の教員 市町村保健師 保育所、幼稚園等の職員

3) 「経済的困窮」の視点から見えること

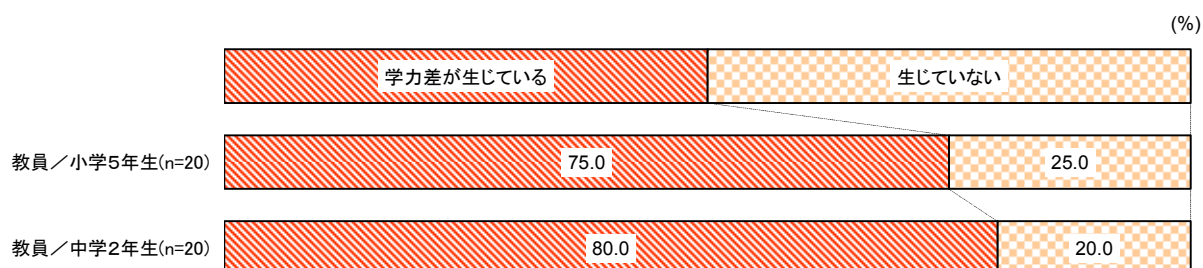
「世帯年収300万円未満か否か」を生活困窮を分析するラインとして定義したところ、世帯年収が低いことで、子どもの学力の遅れや基本的な生活習慣の乱れに影響があったり、衣食住や学校の費用など基本的な日常的な生活費の不足に悩むなどの状況（図表 2.1.5）が見られたほか、経済的困窮により、修学旅行に参加できない、望んだ学校に行けない、入学金が払えないなど様々な形で子どもの教育機会の喪失につながる事例が見られた。また、経済的困窮の問題については、親の安定した就労が重要であることや、親の安定した就労は家庭生活の安定につながるということがわかった。

(2) 学力の遅れ・生活力の不足について

1) 数字から見る現状

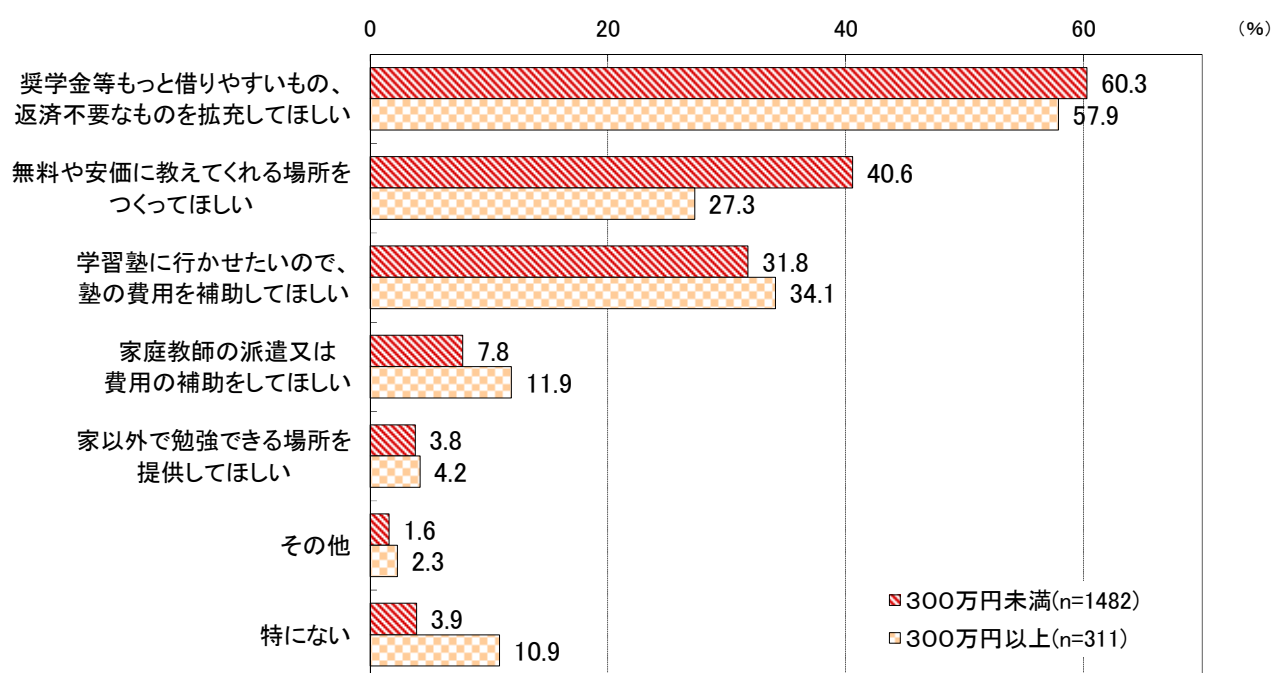
教員に、児童生徒の家庭における経済状況により学力差が生じているかを聞いたところ、小学校の教員の75.0%、中学校の教員の80.0%が「学力差が生じている」と回答している。

<図表 2.1.7 調査C-5【教員】家庭の経済状況による学力差の有無>



また、ひとり親家庭では、「奨学金等もっと借りやすいもの、返済不要なものを拡充してほしい」「無料や安価に教えてくれる場所をつくってほしい」「学習塾に行かせたいので、塾の費用を補助してほしい」といった学習支援への期待が高い。特に、「無料や安価に教えてくれる場所をつくってほしい」については、世帯年収300万円未満の世帯で、それ以上の世帯と比べて高くなっている。

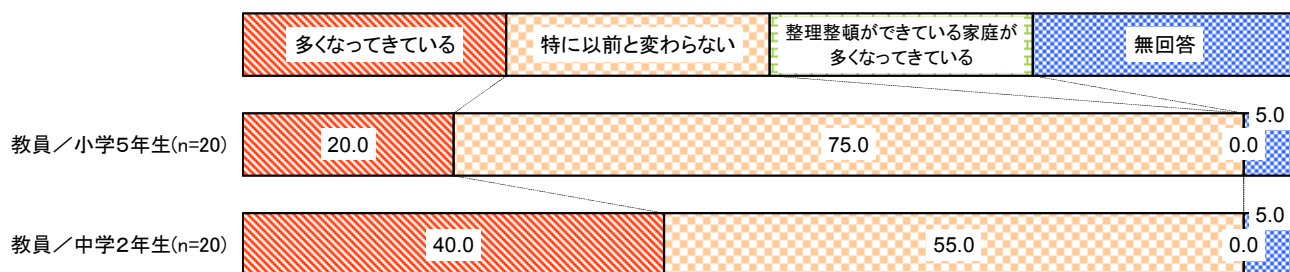
<図表 2.1.8 調査D：ひとり親家庭 問29子どもの学習支援について期待すること>



「整理整頓ができていない家庭が多くなってきていると思うか」を教員に聞いたところ、小学校の教員の20.0%、中学校の教員の40.0%が「多くなってきている」と回答している。

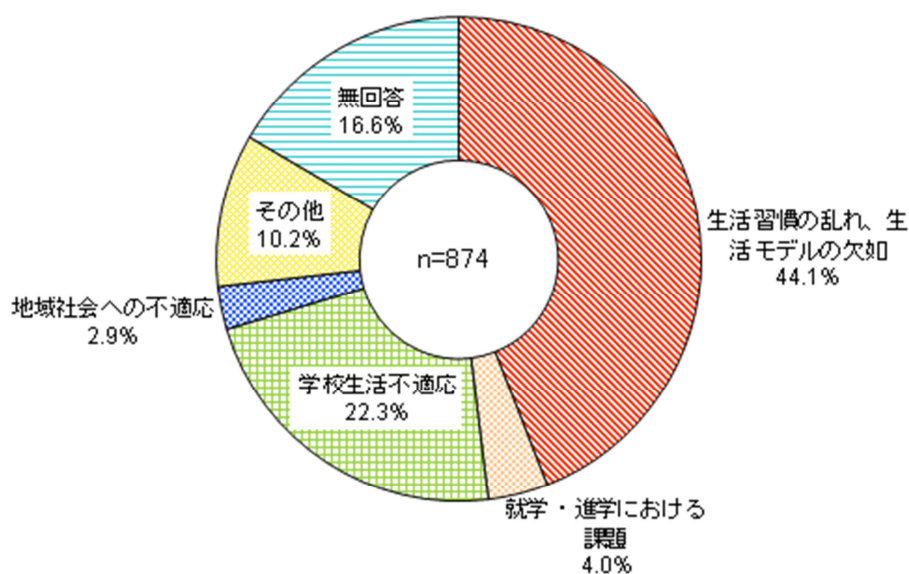
＜図表 2.1.9 調査C-5【教員】整理整頓ができていない家庭の動向＞

(%)



また、支援機関の職員等が、家庭からの相談を通じて特に課題と感じていることとしては、「生活習慣の乱れ、生活モデルの欠如」をあげる人が44.1%と最も多く、次いで「学校生活不適應」が22.3%となっている。

＜図表 2.1.10 調査A-1【データ】問4子どもや保護者、家庭からの相談を通じて感じていること＞



調査Cにおいては、小中高校生に『得意なものや自信のあるもの』を聞いている。

<図表 2.1.1.1 調査C-1, 2, 3 設問『得意なものや自信のあるもの』の選択肢>

あなたには、得意なものや自信のあるものがありますか。あてはまるものを全部選んで番号に○をつけてください。		
1 勉強	2 運動	3 遊び
4 友達思い	5 人を笑わせる	6 ファッション
7 勇気	8 正義感・ルールを守る	9 男の子や女の子に人気
10 負けず嫌い	11 ゲーム	12 ダンス
13 その他	14 ない	
※「ゲーム」「ダンス」については、「小学生」のみに聴取		

『得意なものや自信のあるもの』の数に応じて、自己肯定感の高さを5段階（「高い」～「低い」）で分類した結果は以下のとおりであった。

<図表 2.1.1.2 調査C-1『得意なものや自信のあるもの』の数と自己肯定感の高さ>

自己肯定感	得意なものや自信のあるもの	小学生		得意なものや自信のあるもの	中高生	
		回答数	回答率		回答数	回答率
高い	6つ以上	130	19.2%	5つ以上	246	21.7%
やや高い	4～5つ	194	28.6%	3～4つ	189	16.6%
普通	2～3つ	233	34.4%	2つ	228	20.1%
やや低い	1つ	92	13.6%	1つ	294	25.9%
低い	なし	25	3.7%	なし	176	15.5%
—	無回答	4	0.6%	無回答	3	0.3%
—	計	678	100.0%	計	1,136	100.0%
—	平均値	3.6	—	平均値	2.2	—

また、調査Cにおいて、小中高校生に『今までに体験したこと』『参加したことがある地域活動』（小学生は、『近所の子どもたちと参加したことがある行事』）を聞いている。

<図表 2.1.13 調査C-1 設問『今までに体験したこと』『参加したことがある地域活動』>

<p>今までに体験したこと</p>	<p>あなたは今までに次のような体験をしたことがありますか。あてはまるものを全部選んで番号に○をつけてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 歩いて山にのぼったこと 2 自分の力で大きな木にのぼったこと 3 キャンプをしたこと 4 太陽が昇るところや沈むところを見たこと 5 海や川で貝をとったり魚をつったりしたこと 6 夜空いっぱいにかがやく星をゆっくり見たこと 7 チョウやトンボやバッタなどの昆虫をつかまえたこと 8 野鳥を見たり、野鳥の声を聞いたこと 9 海や川で泳いだこと 10 ほとんど何も体験をしたことがない
<p>中高生：地域活動 （小学生：近所の子どもたちと参加したことがある行事）</p>	<p>あなたは、次のような地域の活動に参加したことがありますか。参加したことがあるものを全部選んで番号に○をつけてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 道路や公園のそうじ 2 子ども会などの廃品回収 3 郷土芸能の伝統保存活動 4 お年寄りや身体の不自由な人の施設訪問 5 地域の行事（各種のスポーツ大会など） 6 季節の行事（どんどやきなど） 7 ボーイスカウト・ガールスカウト等の青少年団体の活動 8 その他の活動（ ） 9 参加したことがない <p>※「小学生」では、「ボーイスカウト・ガールスカウト等の青少年団体の活動」と「その他の活動」は聴取していない</p> <p>※「小学生」にのみ「いろいろなお祭りに参加する」を聴取</p>